

はじめに

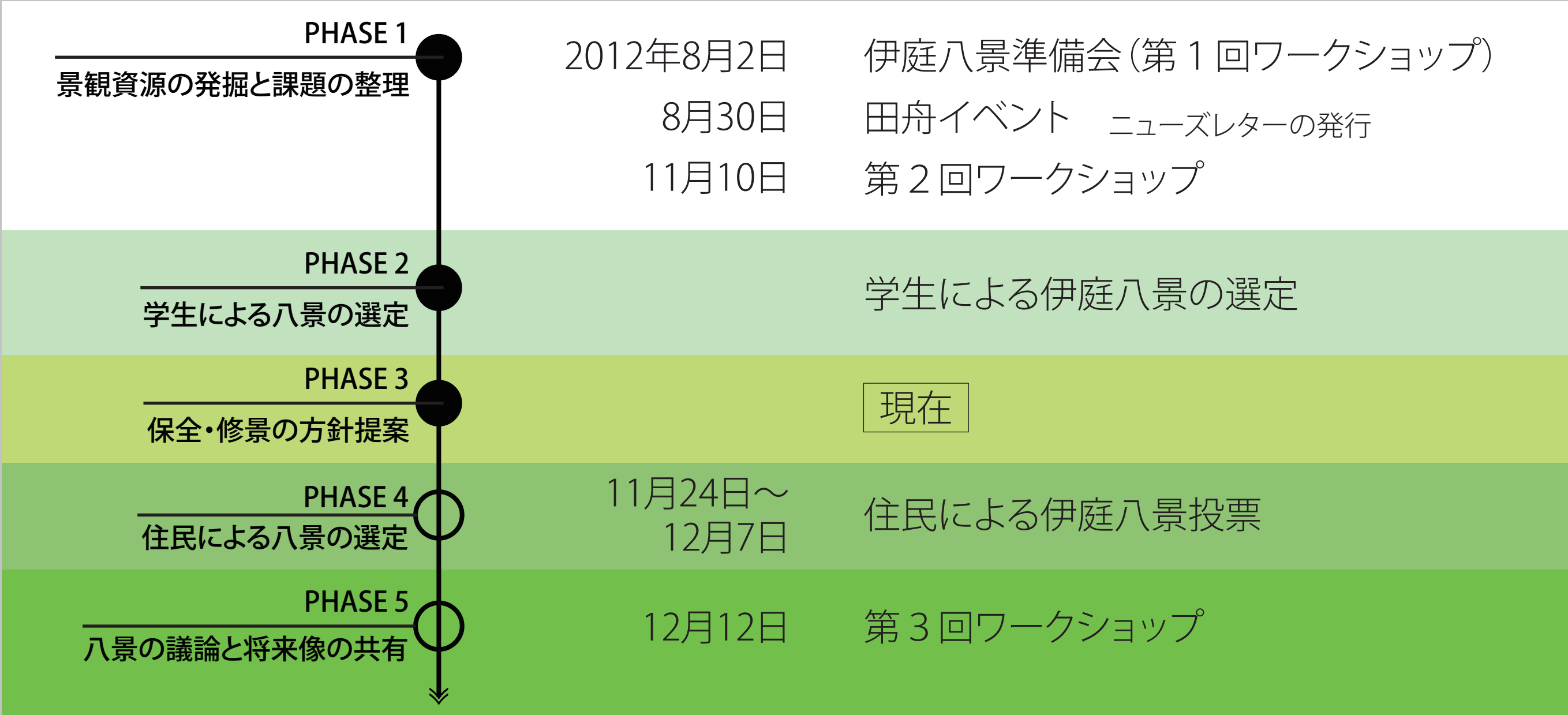
## 伊庭町の水郷景観と保全活動の経緯



伊庭は滋賀県東近江市の琵琶湖沿岸に位置する水郷集落である。町中を水路が巡り、カウトと呼ばれる石積み の階段や歴史を重ねた古い石垣が各所にみられる。しかし自動車の普及や上下水道の整備などといった生活構造の変化に伴い、水路は次第に埋められ、狭められてきた。今では水路の石垣が鉄製の矢板やコンクリートに変わっている箇所が目立ち、生活と密接な関係にあったかつての豊かな水郷風景を感じることは難しくなっている。

そんな中、伊庭の歴史や水路を守るため、数年前より『伊庭庄の歴史を語る会』や『水郷美化保存会』といった自治組織が活動を始めた。近年では東近江市も景観形成重点地区や重要文化的景観の選定を目指し、住民と協働している。このような流れの中、我々は「八景」の選定という手法を用いて、伊庭の水郷景観の保全・修景の方向性に関する検討を行うこととした。

## 本取り組みの流れ



### 第3回WSと今後の方針

第3回WSでは学生が選んだ八景と、住民投票によって選ばれた八景を比較・議論し、最終的な『伊庭八景』を決定する。また、その『伊庭八景』を基に伊庭にふさわしい将来像や物語を議論し共有する。最終的には修景の可能性が見込まれるものに関して将来像や物語を踏まえて修景を行い、報告会と展示会を行う。

## 保全・修景方針の提案方法

### PHASE 1 景観資源の発掘と課題の整理

## 様々な角度から景観資源の発掘を試みる

### ◆住民の景色への意識を把握する／伊庭八景準備会(第1回ワークショップ)

伊庭八景準備会を開催し、長年伊庭に住んでおり、地元を特によく知る自治組織「歴史を語る会」の皆さんに参加していただいた。「今好きな風景」「昔好きだった風景」「これから良くしていきたい風景」を議論してもらい、住民ならではの景色への意識を把握した。

### ◆景観資源を可視化する／田舟イベント

次に、景観資源の可視化を試みた。水路を舟で遡上し、田舟を利用した農業が盛んに行われていた昭和20年代の情景を再現し、生活利用としての水路と田舟の価値を可視化し、その体感を再発見・共有した。また、田舟に乗って普段は見られない水路内に入り、昔の人々が見たであろう景色を再現した。

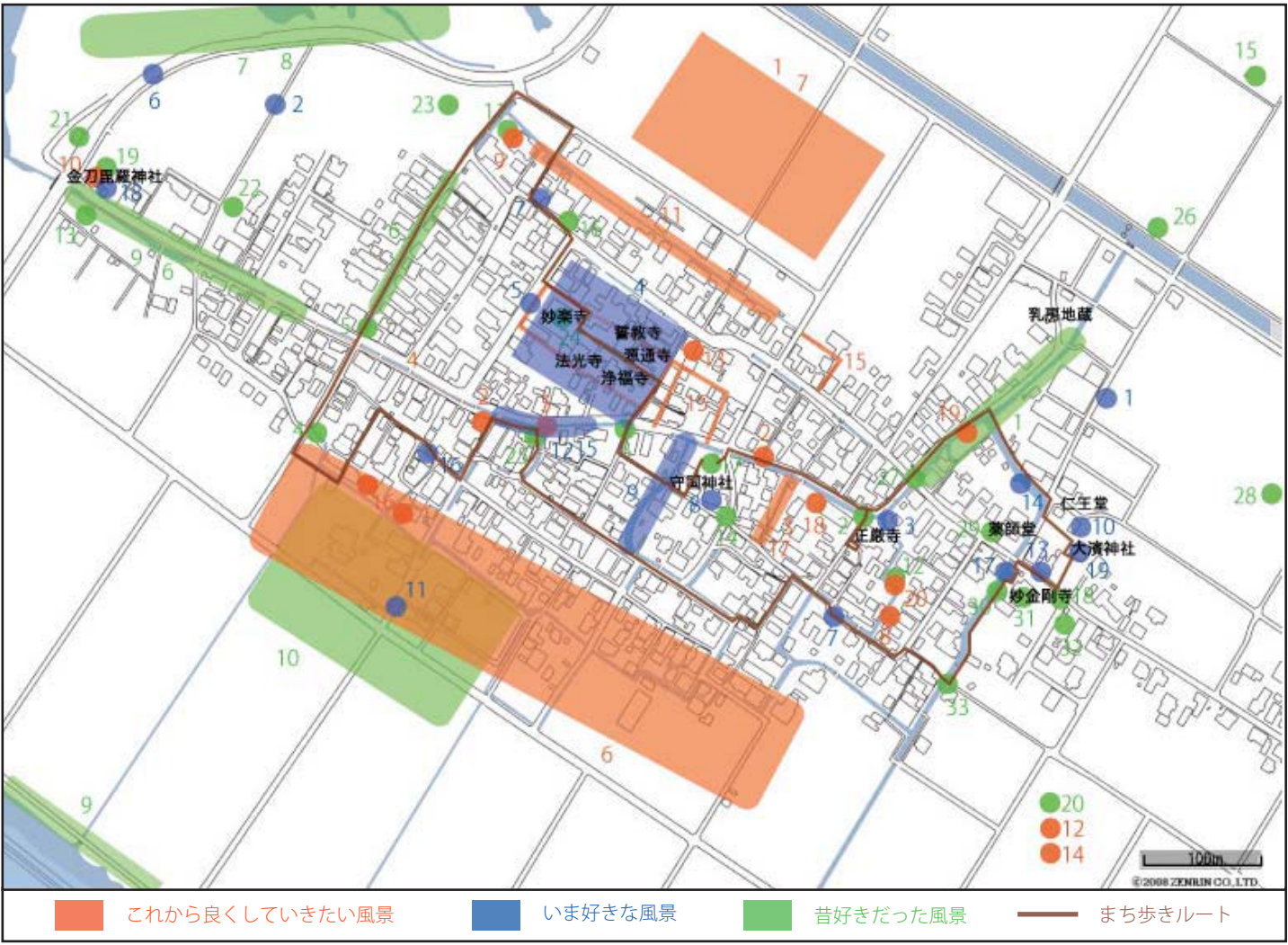
### ◆外部からの魅力を洗い出す／第2回ワークショップ

そして、伊庭町の住民以外の市民を含めてワークショップを開催し、まちあるきを通して、外の人から見た魅力を洗い出した。「歩いてみてよかったところ」と「歩いてみてもったいないと思ったところ」を挙げてもらった。



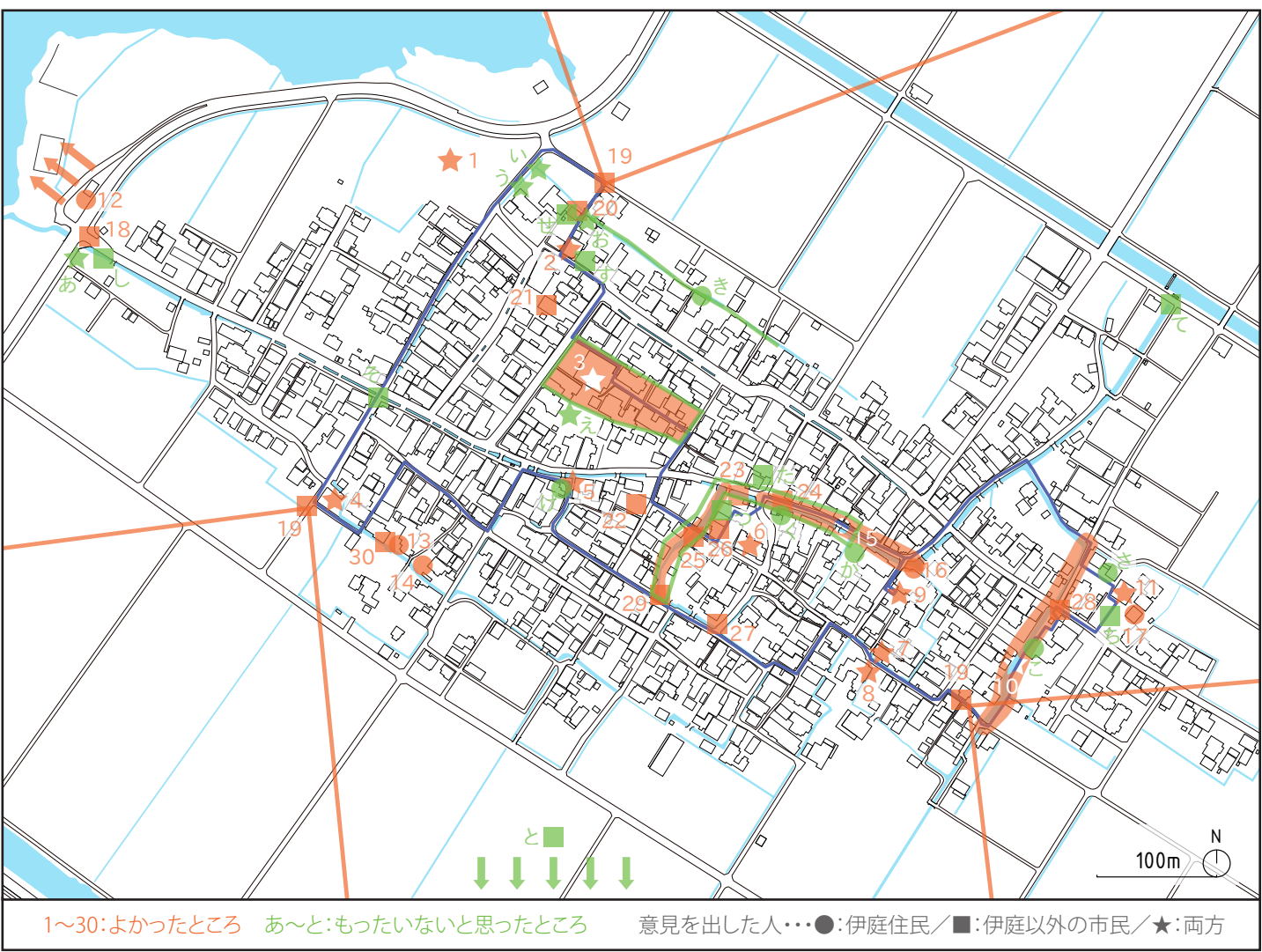
## 景観資源マップの作成

伊庭八景準備会の結果



- ・長年伊庭に住んでいる人々は昔からあまり変化のない場所に価値を見出す傾向がある(例: 寺社仏閣、石垣)
- ・カウト、田舟、船着場といった水路に関係する失われつつあるものの保全・改善を望む傾向がある
- ・水路にたまった泥の掃除や、お寺まわりの堀における水流復活についての具体的な提案が出された

第2回ワークショップの結果

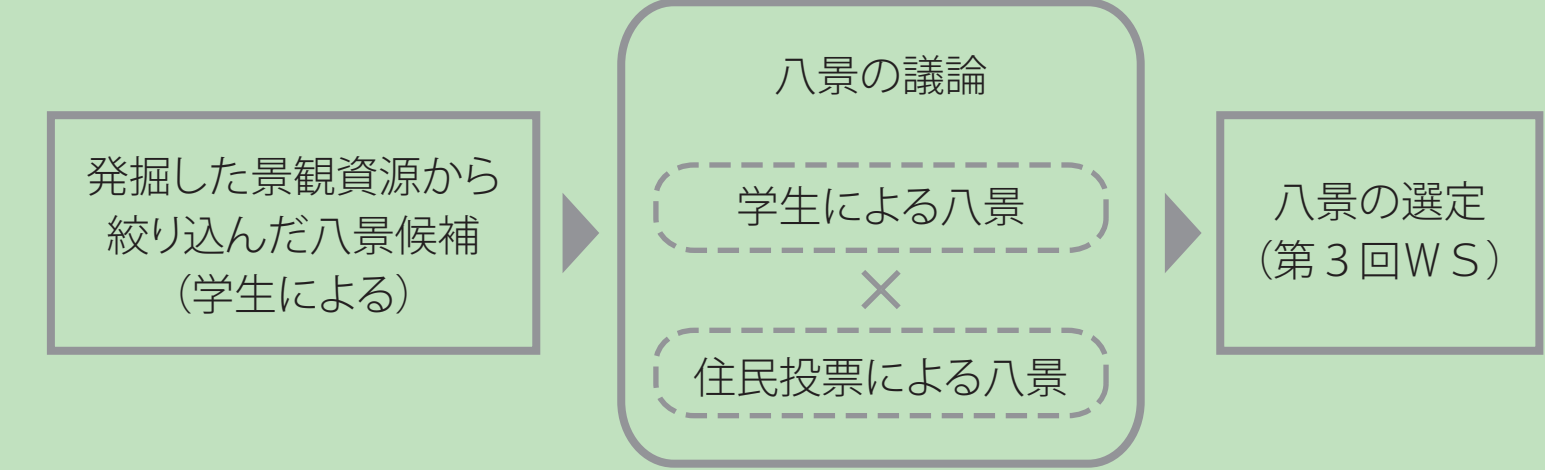


- ・住民は自らの思い出とともに場所を語ることが特徴的である
- ・市民は機能面よりも趣や町の歴史を見た目から感じられるものを多く挙げる
- ・フリーマーケット等新しい活動も提案された
- ・まち歩きを踏まえたため、水路や山の景色など、連続的でスケールの大きいものが多かった

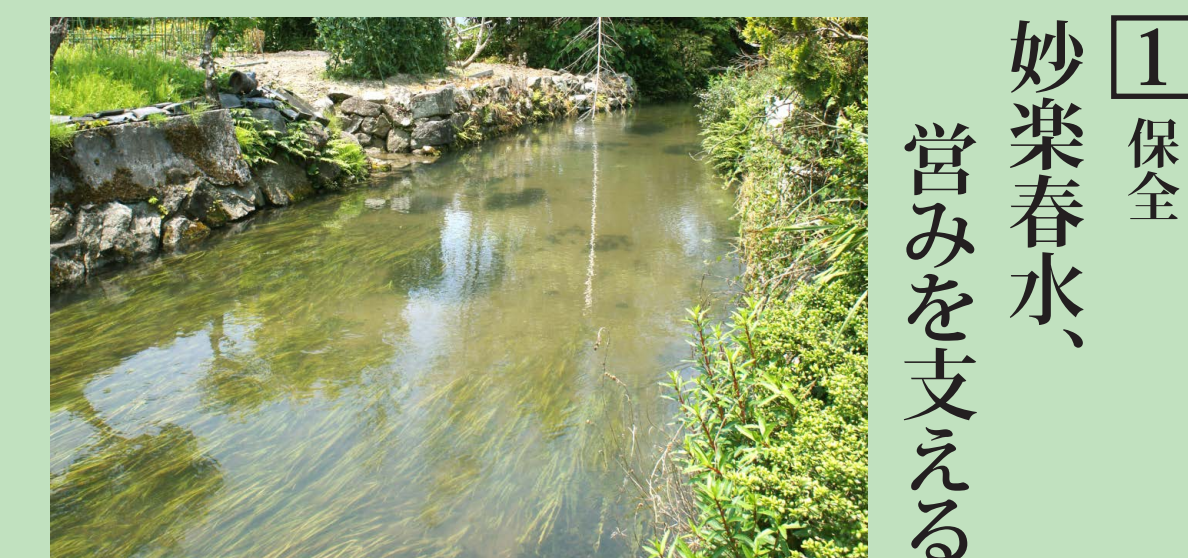
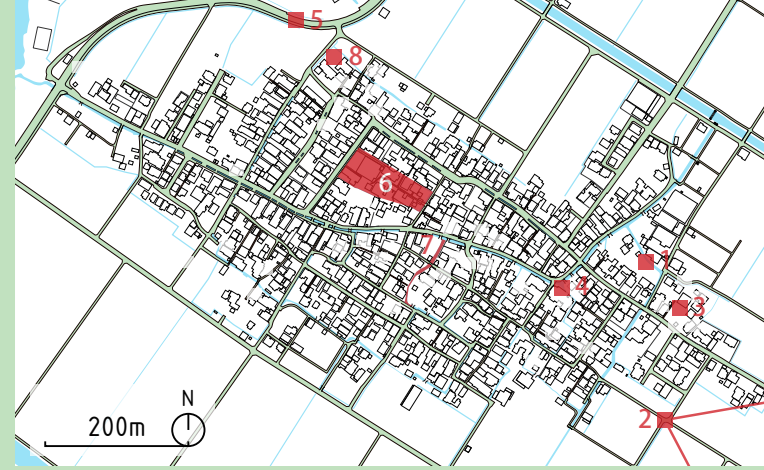
## PHASE 2 学生による八景の選定

現地調査やWSの結果をふまえて、学生による八景の選定を行った。また、現在伊庭八景の住民投票を行っている。最終的な八景の選定は、第3回WSにおいて、ここに挙げた八景と住民投票によって選ばれた八景を基に、住民との議論によって決定する予定である。

◆八景選定チャート



◆学生による八景の位置図



悠々と泳ぐ小魚や、澄んだ水と水草が水の綺麗さを表している。S20年代後半までは水も飲まれ、夏には水遊びをする子供があちこちで見られた。生活を育んできた水の清澄さは伊庭の水路の歴史的な視点からも重要な景観要素である。



伊庭からは織山と水田を美しく望められる。伊庭に800年以上伝わる「坂下し祭り」では、五穀豊穡を願い織山山腹の織峰三神社から三基の神輿を命がけで引き摺り下ろす。山は人々に安らぎを恵み、生活を見守るように佇む風景の核である。



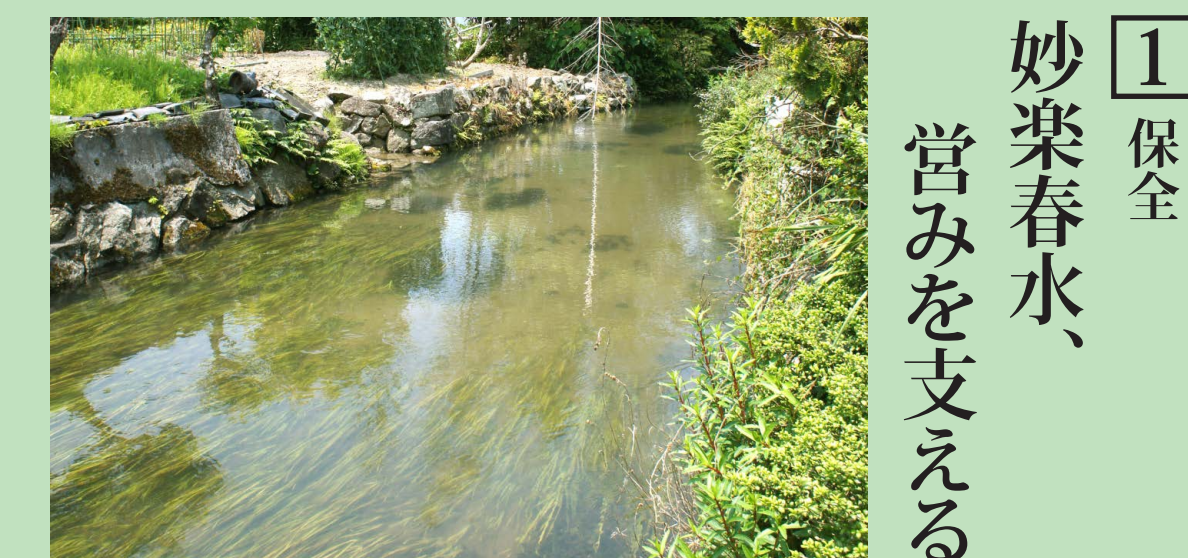
仁王堂(鎌倉時代前期建立と推定)は葎葎きの入母屋造りで、県の有形文化財である。これらは伊庭の入り口に位置し、伊庭の代表的な風景の一つであると同時に様々な祭礼の舞台である。二度のWSからも、住民の誇りの一つであることが伺えた。歴史と共に住民の想いを紡いでいる。



かつて内湖沿いには、多くの人がおし網で魚を捕る風景が存った。近年は関西圏から釣りをする人がこの周辺に多く訪れている。この人達におし網で魚を捕ってもらう活動が住民主体で生じれば、かつての風景を再現することが出来るだろう。住民と外部の人の協働によって再生される景観になり得る。



伊庭城址横の水路は昔からの石垣や幅が残り、昔と変わらない趣が感じられる。隣接する家の住人が溜まった土を取り除く等、水路への思いが伺える。未だ残っている土も住民の協力を取り除くことができる。この水路をきっかけに多くの志が生まれることを期待する。



悠々と泳ぐ小魚や、澄んだ水と水草が水の綺麗さを表している。S20年代後半までは水も飲まれ、夏には水遊びをする子供があちこちで見られた。生活を育んできた水の清澄さは伊庭の水路の歴史的な視点からも重要な景観要素である。



伊庭からは織山と水田を美しく望められる。伊庭に800年以上伝わる「坂下し祭り」では、五穀豊穡を願い織山山腹の織峰三神社から三基の神輿を命がけで引き摺り下ろす。山は人々に安らぎを恵み、生活を見守るように佇む風景の核である。



この田舟は正厳寺の住職が廃船を貰い受け修復したもので、H23年の秋から保留されている。かつてはば一軒に一艘存在した田舟だが、現在も見られるのはこの田舟のみである。昔の水郷の風情とともに、住民の水路や田舟に対する想いが顕われる。



四つの寺中が存在する妙楽寺では毎年8月に系図詣りが行われ、先祖との縁を感じられる。水路が妙楽寺と寺中を囲む水路の構えは珍しいが、水路には土がつまり、水は流れていない。この土も住民たちが協力すれば取り除くことが可能である。



この船着場は江戸時代の船庄さんが使っていた。土が堆積し樹木が生えているものの、石垣が残り昔の生産活動の跡を感じる。面積が広く、土を取り除くには多くの住民の力が必要だ。よって、ここは住民の団結した姿が映し出される空間である。

## PHASE 3 保全・修景の方針提案

## 修景における4つのコンセプト

### 1. セルフビルド

浦川や舟着場の土を取り除く／妙楽寺周りの水路のつまりを解消／石垣・カウトの石積みなど昔の方法で修復／協働での葎葎き屋根の葎き替え／家の前の植栽管理  
――> 住民の意識の向上／伝統的な風習・文化の継承

### 2. エイジングの良さを際立たせる

石のカウトや石垣を残す／擬岩・擬木は使わない／規則正しい植栽配置は避け、自然に近づける  
――> 古いものに調和させ、本物の歴史的価値が残っている印象を残す

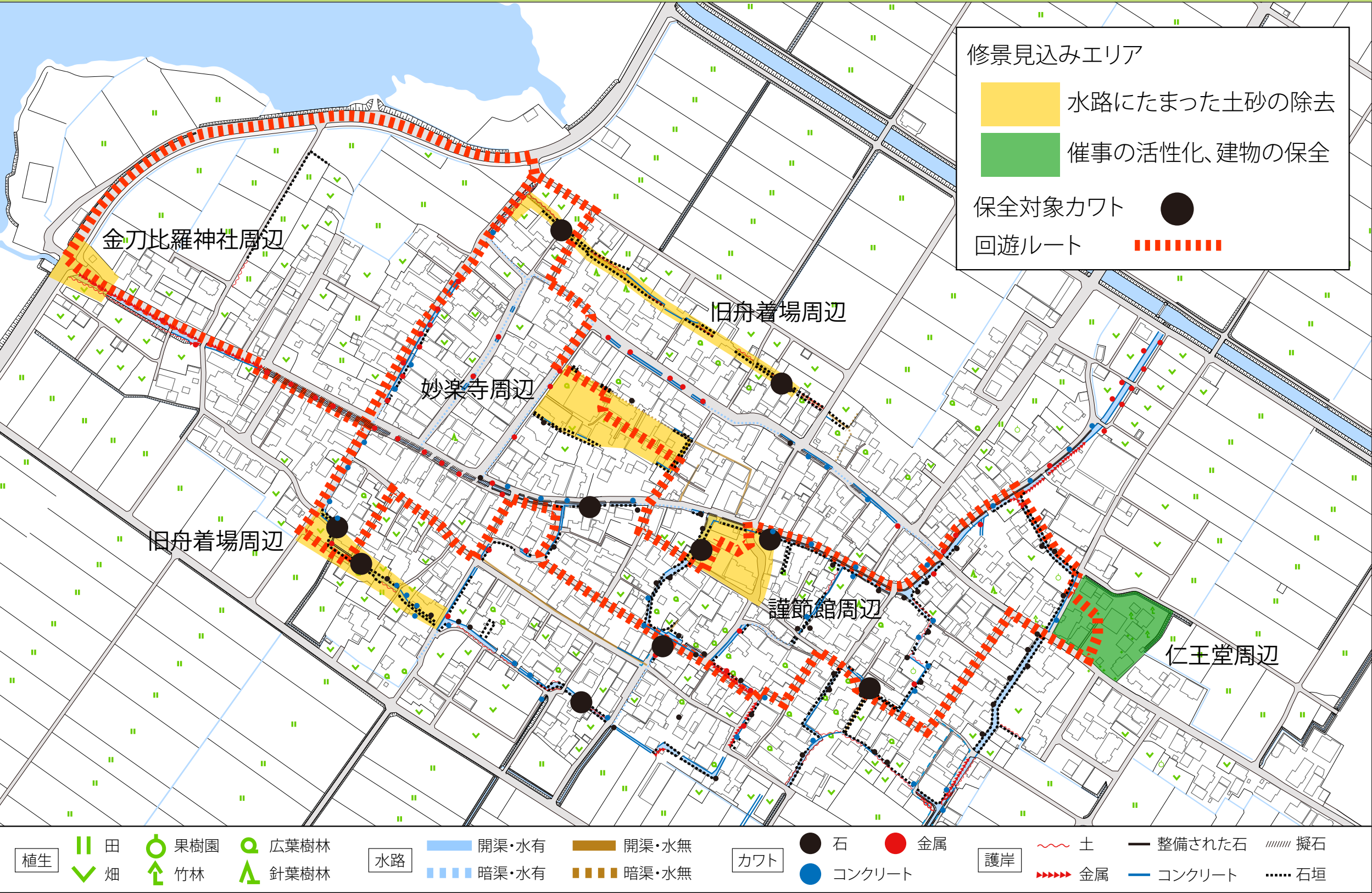
### 3. なくなってしまったものや場所は昔の名残を感じられるようにする

三ツ橋や伊庭の港跡に掲示板や石碑の設置／散策ルートの設定／残っている伊庭桃の木を保全(できれば挿し木で増やす)  
――> 文化的・歴史的価値の向上、記憶の伝承

### 4. 子どもを中心とした水路の利用を促す

子供が安全に水遊びできる水際設計／水の利用がしやすいカウト／田舟イベントの継続／ガードレールの代わりに植栽で境界をつくり、近づきやすくする  
――> 子供の原風景の形成／生活景の再生

## 修景の可能性が見込まれるエリア



住民による自主的な保全・修景活動の意思がワークショップの中で読み取れ、かつ、住民の重視する歴史的価値のある場所または個人の思い出や記憶とともにその風景が語られる場所をマッピングした。巡回ルートはなるべく水路沿いを通り、修景エリアをめぐるような道を選定した。

## 修景案

